



## 別れ方の用意

～思いを残さず、別れること～

校長 澤田 純一

「春曙」、夜がほのぼのと明けはじめ、次第に物が見分けられるようになるころを示した言葉です。平安時代の随筆『枕草子』の冒頭部分で、「春はあけぼの」と書き下ろされていると言えば、皆さんにも馴染みのある言葉ではないでしょうか。凍えるような冬が過ぎ、訪れた春におもむきを感じる昔の日本人の気持ちの表れなのかもしれません。そのようなことを考えつつ今朝もプルートと散歩に出かけます。すると、少しずつ夜明けが早くなってきたことに気づきますね。そして、昇る太陽にも力強さが加わり、ふと視線を下すと寒風吹きすさぶ冬に耐え、それでも時来れば、たくましく芽を出す命の輝きに心が揺さぶられます。それはあたかも皆さんの未来の姿を象徴するかのとき、と感じます。反面、春は別れの季節でもあり寥々たる思いに駆られることもあります。まさに「一期一会」という言葉は、この季節のためにあるのではないかと思うのです。「一期」は「一生」のこと、「一会」は「一度の機会・出会い」のことを言います。つまり、一生に一度の出会いであり、二度とないという意味で使われます。この一期一会の由来は、「茶会に臨む際は、その機会を一生に一度のものと心得て、主客ともに互いに誠意を尽くせ」と、茶会の心得を千利休が説いたものとされています。

皆さんは、この東中で縁あって様々な人と出会いました。学級、学年、部活動、委員会など本校に集うことによりたくさんの出会いがあったわけです。それは、かけがえのない出会いであるはずですが、皆さんはその出会いを大切にしようと心掛けたでしょうか。私が考えるに「今になって思えば、あの人はいい人だった。もう少し話をしておけばよかった。仲良くしておけばよかった。」と別れた後に思うことは残念なことです。人との出会いは、今が大切であり、現在目の前にいる人に尽くすことが肝要であると思うのです。そして、そのことが「思いを残さず別れること」に繋がります。特に3年生については、このことを意識し、そして、長い年月が経過しても再開した時、互いに笑顔で語り合える人間であってほしいと願うものです。私は、当て字は嫌いなのですが「出会いの会は愛である」とも思います。4月になれば、それぞれ新しい生活が始まります。今こそ「別れ方の用意」を形に表してくださいね。

そうそう、忘れてはならないもう一つ大事な別れ方があります。それは「卒業式後、正門を出たら必ず学び舎を振り返ること」そして、その光景を眼に焼き付けた後は真直ぐ前を向き揚々たる表情で未来へ、そして大海原へ力強く旅立つこと。それが天下の東中生たる者の母校との別れ方と思うのです。

### 【保護者・地域の皆様】

保護者の皆様そして、多くの地域の方に支えられた一年間であります。ありがとうございました。おかげ様で、何とかここまでたどり着くことができました。今後も保護者の皆様の想いを受け止めながら、地域の皆様とともに歩む学校経営の推進に努めてまいります。よろしく願い申し上げます。